

オハイオ州の3月は、まさに「三寒四温」という言葉が相応しい季節です。凍てつくような冬の厳しさが名残惜しそうに居座る一方、ふとした瞬間に鼻をくすぐる柔らかな風が、春の訪れを予感させます。アメリカでは、”March comes in like a lion and goes out like a lamb”（3月はライオンのように荒々しく始まり、子羊のように穏やかに去る）と言われますが、私の心境もまた、挑戦の嵐から深い充足感へと変化していく、極めて密度の高い1か月となりました。

### 【学習面】

#### ・ International Night

留学生が開催するイベントの中でフィンドレー大学最大級の祭典が International Night です。私は日本代表として、静と動が交錯する書道パフォーマンスに挑みました。私たちが揮毫したのは「フィンドレー大学 ありがとう 一期一会」という言葉です。英訳担当も含め、6人で披露しました。演出の要となったBGMには、「愛♡スクリーム！」の楽曲を採用しました。彼女たちの楽曲は、SNSで「ルビーちゃん？はい！」という中毒性のあるフレーズから始まるミームとしてアメリカでも大流行しています。日本語学習者の皆さんがリズムに乗って、弾けるような笑顔でダンスを披露してくれている中、私たちはその熱量に呼応するように筆を走らせました。彼らの躍動感あふれる動きが、会場の視線を釘付けにし、ステージ全体のボルテージを引き上げてくれました。私は日本語で「ありがとう」の5文字を担当しました。たすき掛けをピシッと締め、舞台に立った瞬間の凛とした空気感は、今でも覚えています。練習では完璧だった行程も、本番特有の熱気や、時間の制約というプレッシャーがあり、とても緊張しました。ダンスがフィニッシュを迎えるのと同時に、私が最後の一面を書き終えた瞬間、会場は喝采に包まれました。日本人学生と日本語学習者が、言葉や文化の枠を超えて一つの表現を完成させたあの瞬間の達成感、一生忘れられない宝物です。

また、ステージ外の交流ブースでも、日本の今と伝統を体験してもらうために工夫を凝らしました。日本のソウルフードとして「ツナマヨおにぎり」を提供したのですが、意外にもアメリカの学生たちから人気で、用意していた分は瞬く間に完売しました。さらに、食品ブースの隣では、箸を使って小豆を移し替えるチャレンジコーナーを設置しました。今回は、小豆の代わりにビーズなどを用いました。おぼつかない手つきで苦戦しながらも、コツを掴んだ瞬間に満面の笑みを浮かべる子どもたちの姿が印象的でした。

ブース運営の合間を縫って、多国の文化も堪能しました。特にロシアのクレープ (Blini / Блины) の素朴な甘さや、ベトナムの Bò Bía (生春巻き) の鮮やかな食感には、そ

の土地の歴史や風土が凝縮されているようで、深い感銘を受けました。現地でマーケティングを学ぶ者として、その国特有の味や音楽がいかに強力なブランドとなり、言葉を越えた共感を生むかを肌で学びました。この夜に感じた多幸感と、未知の文化への知的好奇心は、将来お金を貯めて世界各国を飛び回り、自分の目で世界を確かめたい、という私の夢により具体的な輪郭を与えてくれました。



#### ・ Children mentoring

Communicative Practice の授業の一環として、日本の留学生が主体となり、現地の子どもたちを対象とした日本式の運動会を企画、運営しました。アメリカの個人主義的な競争文化とは異なる、日本の運動会特有の「一致団結」という概念を体験してもらう良い機会になったと思います。玉入れ、綱引き、大縄跳び、大玉転がしといった種目を通じ、全員で協力して目標を達成する喜びを伝えることに注力しました。言葉だけでは伝わりにくいルールも、身振り手振りを交えて熱心に指導し、子どもたちも次第にチーム一丸となって勝利を目指すようになりました。フィナーレには、全員で大きな円を描きマイムマイムを踊りました。会場が子どもたちの無邪気な笑顔で満ち、人種や言語を超えた一体感を身をもって感じました。



#### 【生活面】

#### ・ Choir concert trip in Europe

Spring break を利用し、Choir のクラスでドイツとチェコの二か国へコンサートツアーに行きました。この旅は、単なる観光ではなく、音楽を通じて歴史の重要性に触れる貴重な経験となりました。

今回の遠征は、目的地での経験だけでなく、そこに至るまでの移動の中にも、留学生活の本質を象徴するような忘れがたい出来事がありました。出発のデトロイト空港

(DTW)でのセキュリティ・チェック(TSA)の長蛇の列は、遠征への高揚感を少しだけ削ぐような、退屈で長い待ち時間になるはずでした。しかし、そこで私の前後に並んでいた見知らぬ人々とした会話がその時間を一変させました。驚いたことに、その方々は日本と非常に深い関りを持っておられました。アメリカの空港のど真ん中で、偶然知り合った人々と日本語で温かな談笑が始まった瞬間、世界がいかに狭く、そして温かいものであるかを痛感しました。「日本から来たの?」「私は以前あそこに住んでいてー。」そんな何気ない会話が、出発前の緊張を解きほぐしてくれました。本来なら通り過ぎるだけの他人になり得る人が、共通の言語や背景を通じて知人になる。このような出会いは、この後のドイツ・チェコへの旅が素晴らしいものになるという、何よりの予兆に感じられました。

また、今回の遠征で観光以上に私の魂を揺さぶったのは、ドイツとチェコの両国で、現地の大学生合唱団と行った共同コンサートでした。国籍も、育ってきた背景も、普段話す言葉も全く異なる私たち。しかし、同じ一冊の楽譜を広げ、指揮者がタクトを振った瞬間、そこには一切の境界線が無くなりました。何週間も前からそれぞれが練習してきた旋律が、初めて出会ったその場で重なり合い、巨大なハーモニーとなって教会の高い天井へ吸い込まれていくような圧倒的な響きの中に身を置いたとき、言葉では表現しきれない感覚になり、鳥肌が立つような感動に包まれました。

### 【観光】

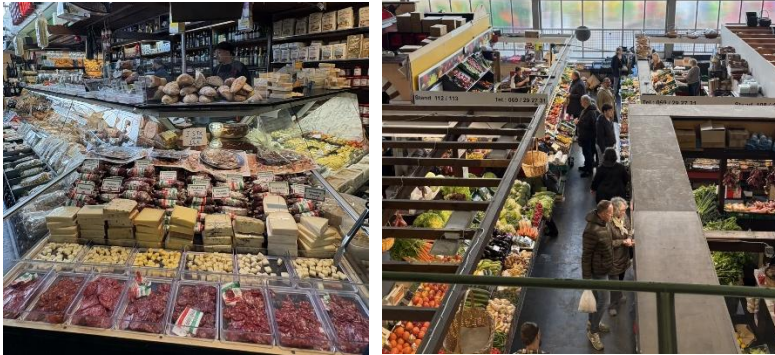
#### ・ フランクフルト旧オペラ座 (Alte Oper Frankfurt / Alte Oper):

戦火で「ドイツで最も美しい廃墟」と呼ばれたこの建物が、市民の寄付によって1981年に再建された背景には、文化を何よりも尊ぶドイツ人の矜持を感じました。時間の都合上、内部に足を踏み入れることは叶いませんでしたが、外観からさえも設計の緻密さとルネサンス様式の美しさに圧倒され、かつて爆破して駐車場にする案があったという逸話が信じられないほどの神聖さを湛えていました。



#### ・ クラインマルクトハレ市場 (Kleinmarkthalle Market / Kleinmarkthalle):

約150もの店がひしめくフランクフルトの台所と呼ばれる場所です。市場独特の生ハムやスパイスの混じった香りに包まれ、ドイツ人の生活の力強さを感じました。本場フランクフルター・ソーセージ(Frankfurter Würstchen)の定義が、羊の腸の使用とブナの木でのスモークにあると学び、マーケティングの視点からもブランドの正統性を維持することの重要性を再認識しました。



• フランクフルト大聖堂 (Frankfurt Cathedral / Kaiserdom St. Bartholomäus) & レーマー広場 (Römerberg Square / Römerberg):

高校時代に世界史を専攻していた私は、フランクフルト大聖堂を訪れた際にすごくテンションが上がりました。世界史の授業で習った、あのカール大帝ゆかりの地。1356年の金印勅書以降、ここは神聖ローマ帝国の皇帝選定の場となり、1562年からは戴冠式も行われるようになったと学んだことを思い出し、懐かしく感じました。皇帝の戴冠式が行われた大聖堂の重厚な石の壁は、何世紀もの権力の変遷を静かに物語っていました。広場の正義の泉 (Gerechtigkeitsbrunnen) を見つめながら、かつて新皇帝の戴冠式が行われた際、ここから水ではなくワインが溢れ出したという祝祭の熱狂に思いを馳せると、教科書の中だけの存在だった神聖ローマ帝国という巨大な歴史の枠組みが、目の前の重厚な建築と繋がりととても感動しました。



• ヴュルツブルクのレジデンツ (Würzburg Residenz / Würzburger Residenz):

ユネスコ世界遺産を訪れることができたことをすごくうれしく思います。階段の間 (Treppenhaus) にあるジョヴァンニ・バッティスタ・ティエポロ (Giovanni Battista Tiepolo) による巨大なフレスコ天井画を見上げた瞬間、飛行機での長旅による首の痛みも忘れるほどの衝撃を受けました。支柱のない広大な空間に描かれた四大陸の擬人化。大戦

の空襲でもここだけが崩れなかったという事実は、もはや奇跡としか言いようがなく、芸術が持つ不思議な生命力を感じさせました。



• プラハ城 (Prague Castle / Pražský hrad) & 聖ヴィート大聖堂 (St. Vitus Cathedral / Katedrála svatého Víta):

山の上にそびえ立つその姿は、お城というよりは一つの完成された街のようで、ギネス記録に載る世界最大級の古城という説明にも納得の壮大さでした。特に、城の中心に鎮座する聖ヴィート大聖堂は、空を突き刺すようなゴシック様式の尖塔が圧巻で、何世紀にもわたって増築を繰り返してきた歴史の重みが外壁の色からも伝わってきました。大聖堂にあるアルフォンス・ミュシャ (Alphonse Mucha) のステンドグラスは、通常のパッチワークのような技法ではなく、ガラスに直接絵を描く技法が取られており、その手法でこそ実現できる、繊細なグラデーションに圧倒されました。光が差し込むと床一面に色が散らばり、万華鏡の中に迷い込んだような不思議な感覚に包まれました。中世から続く権威の象徴としての力強さと、繊細な芸術が見事に融合した、プラハの至宝と呼ぶにふさわしい光景でした。



• カレル橋 (Charles Bridge / Karlův most) & 天文時計 (Prague Astronomical Clock / Pražský orloj):

ヴルタヴァ川 (モルダウ川) に架かるこの橋は、ローマ皇帝カール4世によって14世紀に築かれた、まさにプラハの象徴です。橋に並ぶ聖ヤン・ネボムツキー像 (Statue of St.

John of Nepomuk) のレリーフに多くの人が集まっていたことが、すごく印象に残っています。台座にあるレリーフに触れると幸運が訪れる、再びプラハに戻ってくることができるという言い伝えがあり、長い年月を経て多くの人に撫でられたその場所だけが黄金色に輝いていました。私も再訪を願いその冷たい金属に触れましたが、過去の人々と願いを共有したような不思議な感覚になりました。また、1410年設置の天文時計で、毎正午、死神が鐘を鳴らし十二使徒が現れる仕掛けを、広場の人々と沈黙して見守った時間は忘れられません。600年以上も前から変わらず人々の目を楽しませ、時間を刻み続けてきた精密な技術への畏怖と、それを守り抜いてきたプラハの人々の愛着を強く感じた瞬間でした。



• **聖バルトロマイ大聖堂 (St. Bartholomew's Cathedral / Katedrála sv. Bartoloměje):**

チェコで最も高い 102.26 メートルの塔を持つこの大聖堂は、街のどこにいてもその存在を感じさせる圧倒的なランドマークでした。塔の上から見下ろしたピルゼンの街並みは、歴史ある建築と近代的な活気が混ざり合い、快晴の日には遠くアルプスまで見渡せるという空に最も近い場所としての神聖さを肌で感じました。



• **フラデツ・クラロヴェー (Hradec Králové) の 白い塔 (White Tower / Bílá věž) & 聖霊大聖堂 (Cathedral of the Holy Spirit / Katedrála svatého Ducha):**

白い塔と呼ばれながらも、実際には現地の砂岩が年月を経て温かみのある黄色を帯びている姿が印象的でした。10トンもの重さがある鐘が鳴り響くたび、中世から変わらぬ街の鼓動を足の裏から感じ、隣接する聖霊大聖堂のレンガ造りの美しさと相まって、この街が

歩んできた堅実な歴史の重みを実感しました。

• **ロブコヴィツ宮殿 (Lobkowitz Palace / Lobkowitzký palác):**

プラハ城の敷地内にあるこの私立美術館で、ベートーヴェンの交響曲第3番『英雄』や第5番『運命』の直筆楽譜を目の当たりにしました。天才たちが葛藤の中で書き込み、何度も修正を重ねた力強い筆跡を見た瞬間、私たちが今 Choir として歌っている一音一音が、長い歴史の糸で紡がれているのだという深い感動を覚えました。

• **巨大回転カフカの像 (K de Franz Kafka / Hlava Franze Kafky):**

45 トンもの巨大な銀色の頭が、42 枚の層に分かれてバラバラに回転し続けるこの像は、中世の面影が残るプラハの街中で異様な存在感を放っていました。実はこれほど巨大でありながら最新のプログラムで制御されており、滑らかにうごめく様子はどこかハイテクな生き物のようにも見えました。面白いのはその設置場所で、あえて市役所の目の前に置かれています。意見が二転三転して話が通じない「お役所仕事」を皮肉るために、あえて顔がバラバラに崩れる像を役人たちの窓の前に突きつけたという、チェコらしいブラックユーモアに溢れた説があると、現地の友人が教えてくれました。表面はピカピカの鏡面仕上げになっているため、回転に合わせて自分や周囲の街並みが歪んで映り込み、自撮りをしようとすると自分の姿が巨大な顔に飲み込まれていくような不思議な感覚を味わえるのも魅力です。夜にはライトを反射して怪しく光りながら回転し、暗闇の中で巨大な顔が形を変え続ける様子は、少しホラーチックで圧倒的なインパクトがありました。



今回の遠征で最も感銘を受けたのは、ドイツやチェコにおける環境保全への徹底した姿勢です。街中では、空のペットボトルや瓶を回収マシンに戻すとデポジットが返金される「ファンド (Pfand)」という制度が生活に完全に溶け込んでいました。また、欧州全体で義務化されている本体から離れないペットボトルのキャップ (Tethered Caps) にも驚きました。最初は飲みづらさに戸惑いましたが、これはポイ捨てを防ぎ、海洋プラスチックを減らすための確固たる意志の表れです。こうした小さな不便さをあえて受け入れ、未来を

守ろうとする環境先進国としてのプライドを肌で感じました。

食文化においても、その土地ならではの知恵と衝撃が詰まっていました。ドイツで味わった、表面の皮がバリバリに焼かれたローストポーク「シュヴァイネクルステンブラーテン (Schweinekrustenbraten)」の迫力は凄まじかったです。チェコでは、牛肉に野菜のクリーミーなソースと克蘭ベリージャムを添える「スヴィーチコヴァー (Svíčková na smetaně)」や、もちもちとした茹でパン「クネドリキー (Knedlíky)」を堪能しました。特に、生のニンニクを揚げパンに直接擦り付けて食べる「タタラーク (Tatarák)」のワイルドなスタイルには圧倒されました。

何より驚いたのは、チェコの人々のビール (Pivo) に対する情熱です。一人当たりの消費量が 30 年連続世界一というだけあって、レストランでは本当に水よりビールの方が安いという現象を目の当たりにしました。現地では栄養価の高さから「流れるパン」とも呼ばれ、ジョッキのほとんどをクリーミーな泡だけで満たす「ムリーコ (Mlíko)」という独特な注ぎ方を楽しむ文化もあり、日本のビール観を覆されるような新鮮な発見の連続でした。

そんな異国の刺激と、環境を慈しむ静かな街並みに囲まれて過ごす中で迎えた 20 歳の誕生日は、私にとって一生の宝物です。日本から遠く離れた地で、一緒に切磋琢磨してきた仲間たちが 20 歳になる瞬間を歌ってお祝いしてくれました。歴史ある街並みを背景に、音楽を通じてより絆が深まったと思います。温かい祝福に包まれて大好きな友人たちと美味しい料理を囲んだあの時間は、どの観光名所よりも輝いて見えました。また、この旅で見つけた数々の発見と、仲間との揺るぎない絆は、私にとって最高に贅沢なプレゼントになりました。帰国まで残り少ない時間を悔いの無いよう過ごしたいです。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu